生活世界と自然への問い

Die Frage nach der Lebenswelt und Natur

高橋正和
Masakazu TAKAHASHI

はしがき

本小論は、筆者が平成六年度文部省在外研究員としてヴッパータール大学に滞在した折に聴講することになった指導教授K・ヘルトの「冬学期講義」に対する覚え書きと注解である。この経緯を簡略すると、一九九三年十月中旬に第一回講義が開始され、翌年二月初旬に閉講となったが、途中二度ほどの休講があった外、全部で22回の講義が毎週行なわれ、筆者はその全てに出席した。ゼミナール参加の学生には講義内容の概略を簡潔に示すプリント(Übersicht)も準備され、きわめて練達周到と言うべき見事な講義ぶりであった。筆者が十月初めにドイツに着任してまもなく開講されたのであるが、当初はやはり相当にテンポの速い会話体の聴き取りに難渋したので、正直言って手元にある当時の筆者のメモ書きの最初の方にはあまりはかばかしい記録もない。したがって、忠実で厳密な講義の再現は期しがたいものの、その概要については配布資料等をも参照しつつ、筆者の講義ノートをもとに要約可能であると思われるので、以下にヘルト教授の最近の思想動向の一端を紹介するという意図もこめて、簡潔に叙述することにしたい。

この冬期学講義のメイン・タイトルには「生活世界と自然」が選ばれており、サブは「アリストテレスとカントとの関連におけるエレメントの現象学」となっている(Lebenswelt und Natur — Phänomenologie der Elemente in Anschluß an Aristoteles und Kant)。アリストテレスは、『形而上学』や『自然学』を中心に集中的に取りあげられたが、カントについてはほとんど言及されることはなかった。本稿では全講義の内の約三分の一にあたる最初の八回分に限定して筆者の注と見解を加えてまとめてみようと思う。(1)

本ゼメスターにおける講義全体の狙いは、「自然とは何か」をめぐる考察にあったのではないかと思われる。言うまでもなく、自然に関しては西欧哲学には古代ギリシア(とりわけ、フォア・ゾクラティカーたち)以来、エレメントのコスモロギーの古い伝統がすでにある。ヘルト教授は、それに対して現象学的考察を加えることで、「自然」と「生活世界」とが切り結び合う地平を照射することに多くの労を割いていたように思われる。それはとりも直さず、フッサール晩年の「生活世界の現象学」に対して、それをさらに一歩も二歩も前進せしめんとする試みでもある。哲学することは、その偉大な開始であるギリシア古典期の哲学精神をいかに自分のものとするかにかかっているということが、「生活世界と自然」との連関を明らかにする一連の考察によって、目の前に鮮やかに示されるのである。現代の科学と技術とが、西欧形而上学に固有なロゴスの内的な必然性によって招

来された完成形態であるとすれば、そのような方途を辿ることになった現代世界の諸問題をどう捉えるべきかについて、元初の思惟への転回は一条の光明を投げ返してくれるであろう。

一、導入的考察

まず「生活世界」という術語についてであるが、E・フッサールのいわゆる「危機書」(Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie, 1936) における科学化された世界と生活世界との対比が想起されるべきである。この両者の対比は当然、一九一〇年代の『イデーンII巻』にもすでにみられる「自然的態度」(die natürliche Einstellung) と、「自然主義的態度」(die naturalistische Einstellung) との区別に対応していることは明らかであろう。自然的態度は、一切のエピステーメーの根底にある原的ドクサとして証示されるが、これに対して自然を対象化して捉えんとする科学主義的な後者の態度こそ、現象学的還元がなされるべきことが主張されたのであった。この基本的な考えが「危機書」に至って「生活世界の存在論[2]」という問題構成へ変換されることになったのは周知の通りである。フッサールによれば、生活世界とは一切の知的・対象化的態度に先立ってつねにすでに直接的に経験に与えられている世界であり、それゆえにもろもろのエピステーメーそれ自身もこうした生活世界に基づけられてはじめて成立しうる知にすぎないものとして捉え返されねばならない。明証的で精密な科学的知やその他のあらゆる学知から、それ自身非明証的で根拠づけを欠くがゆえに原的信憑という他ない生活世界への還帰こそが、真と知の解明に不可避であるという事態は、理性の目的論を高く掲げるフッサールならずとも、一大パラドックスに他ならない。それゆえにいわゆる現象学的還元とは、自然科学主義者が素朴に信じこんで疑わない「即自的で客観的な世界」から、却って「主観的—相対的な」現出世界への、換言すれば共同主観的な生活世界への還元を目ざすものに他ならない。

近代に成立した自然科学の、生活世界に対する関係についてのフッサールの基本テーゼは「危機書」では、(a) 生活世界との前科学的親密性が科学化された世界の意味基底となっていること[3]、(b) 近代科学における生活世界の忘却が近代的生活の意味危機を生ぜしめていること、この二点にある[4]。「自然は数学の文字を使って書かれた書物」であり、「物質のある所幾何学がある」とみなすガリレイは、自然の徹底した数学化を初めて企投したのであり、これによって自然は計算可能性という地平から数学的な理念の衣をまとって登場することになった。この結果、理念化された自然が学以前の直観的自然にすりかえられ、いわゆる「客観的で真なる」科学的世界が唯一妥当するものとみなされることになっていくのである。このようにして、全てに先んじて予め与えられている唯一現実的である生活世界は数学的シンボルの、あるいはそのような類の理念の衣の下に隠されて忘却される他ないのである。フッサールがいみじくも語っているように、「ガリレイは発見する天才であると同時に隠蔽する天才でもある[5]」。

かくて物理学的客観主義、ないしは素朴な実証主義精神が、「客観的で即自的な世界」という近代以降に支配的な真理のモデル（科学的な真理）を設定するのである。フッサールはこれに対置するに超越論的主観主義をもってし、普遍的で根源的な理性の哲学を標榜し、これに依拠しつつヨーロッパ的人間性という理想に示される「哲学的理性に基づく人間性」というテロスの回復を試みんとしたのである。

人間に生得的とされる普遍的な理性を顕在化することを自らの使命と考えるフッサールは、それゆえに科学が無反省にその上に立っている、科学の意味基底としての生活世界へまずもって還帰することを第一に主張するのであろう。このように、忘却された生活世界をみずからにとり返すことは、ヨーロッパの哲学の展開を通じてはじめて自覚化されるに至ったとされる普遍的人間理性——それは自己を理性的なものとして理解する人類にとっての目標でもある——の回復を果たすという独自の歴史の目的論を含意している。

ところで、生活世界に即して経験されてきた自然は今日至る所で地球的な規模でエコロジカルな破局という事態に直面している。自然とは何かといえば、それは「おのずから生長するもの」の領域に対する名称である。自然はたとえば季節の推移の中におのずと出現して、天地の間にあらわに自展する一連の出来事として身近にいつでも出会われている[6]。換言すれば、我々が恣意的に処理せんとする力づくに対しては、自然の不随意的な現出は身を退けて隠れてしまうであろう。

また、フッサールの生活世界は、J・ハーバーマスの言う「生活世界の植民地化[7]」(Kolonialisierung der Lebenswelt) という概念にも示されているように、生産至上主義的な効率の追求と合理化への要求が一層求められる現代のハイマート・ロース（故郷喪失）的な状況下で、技術化された世界に対する批判的な対照概念としても転用されている。この点に関しては、科学の応用が技術であると単に言う

だけでなく、科学の本質をむしろ技術に求めたハイデガーの重要な観点も参照されてしかるべきである。

生活世界は、理念化された科学的な世界と対照的な主観的な(主観に関係する)現出の世界としてあり、そのような現出世界としてそれは現象学のテーマ（現出論）である。ところで、生活世界的に現出するものの例として、古代ヨーロッパの火・水・地・風という四大のエレメントを挙げることができるが、それはとりわけエコロジカルな危胎に瀕している我々の時代において何か本質的な示唆を含んでいると思われる。エレメント（元素）は、単に無機的なマテリアルを指しているのではなく、生き生きしたものが基づいている当のものとして、故郷的な生活世界の根本的構成要素である。もちろん生活世界は、科学や技術によって作り変えられた世界を共に包括する普遍概念でもある。科学技術による輝やかしい諸々の成果は「生活世界」の中へなだれこんで来るのである。およそ文化的形成物といえるほどのものと共に生活世界も、歴史上変転してゆかざるをえない。

生活世界はもともと、ギリシア人のもとで哲学的—学的思惟が成立したことをまってはじめて歴史化されることになった。それはまた、特殊ヨーロッパ的なものの誕生を意味する。エコロジカルな世界危機も、このことと無関係ではない。ギリシア人がはじめて生活世界に対して距離をとることにおいて、哲学的—学的思惟は生活世界に対して尚近しい関係を保っていたとみなされるが、その後漸次生活世界からの離反、戒いは忘却へおちこんでいったと考えられる。この観点に立つなら、生活世界への接近は他ならぬ元初の思惟に何らか接近することを含意していると言えよう。生活世界に即して経験された自然、即ちピュシス(Phýsis)こそ初期ギリシアの思想家たちの中心テーマをなしていたものである。実際、彼らはアリストテレスによって自然研究者（ピュシオローゴイ）と呼ばれていた。タレスやアナクシマンドロス、エンペドクレスらがさまざまな論拠によって主張したものはいずれもエレメントのコスモロギーであった。

ところで、こうしたピュシス—思惟に遡って問いかけようとすると、必ずアリストテレスを経由してゆくことになるが、それはなぜであろうか。あの〝前ソクラテス〟という名称で一括されて伝承されているものは、実は初めからそうだったわけではなく、後代の解釈のすべてがアリストテレスのピュシス—思惟に依存しているという事態が見抜けない所から帰結した捉え方にすぎない。フィジコイ、あるいはフィジオローゴイを〝ソクラテス以前〟という呼び名で片付けてしまうことがいかに予断に満ちた背信的なものであることか。それは初期の思想家たちの時代を、名前を挙げればソクラテスと共に、しかし事柄の上からいえばアリストテレスと共に始まる本来の哲学の前史としてしか評価しないということだ。ヘーゲルやニーチェに至るまでの、それどころかつい最近の哲学史に至るまで、後代の哲学者たちのすべてがアリストテレスの視点に依存してきたのである。

アリストテレスの『形而上学』第一巻、三章は、ギリシア初期思想家たちの解釈の拠り所となってきた。アリストテレスの体系的解釈は、原因存在の四つの様式にかんする区別（四原因説）を基にしている。原因(Ursache)とはaitia（ラテン語訳causa）の翻訳であるが、aitiaとは或るものに責任を負っている全てのものにかかわる。即ち、或るものがそれの存在、それの現実存在、それの性質をそれに負うているもののことである。

すでにプラトンにおいて、存在する事物の生成の原理としてイデアとコーラ（トポス）が提出されていた。イデアは超感性的な原理として、純粋にして完全な、同一の存在性を有するが、イデアの模像でしかない生成変化する感覚的事物は、イデアとは全く異質の原理、即ち盲目的で無限定的な質料としてのコーラに由来するものと考えられた。イデアは精神をその本来の場所とするが、コーラはあの四大（エレメント）の混沌たる無規定的なものとして、イデアからの働きを受容する他ない質料的な何かであるゆえに、事物の置かれるべき場であるとされた。プラトン晩年の『ティマイオス篇』においては、イデアと物質とはデミウルゴスの実践的制作によってコーラにおいて結合されるものとして把握されていた。ここに、テオーリアに代わってプラクシス、ないしはポイエーシス中心ともいうべき「実践的制作的思想」、「形成的制作思想」が表明されていることは注目しておいてよい。[8]

これに対してアリストテレスは、イデアといった超越的存在を認めず、却ってイデアを感覚的事物に内在する本質的形相（エイドス）とみなし、この意味における存在を実体（ウーシア）と呼んだことは、哲学史の常識に属するであろう。アリストテレスによれば、哲学者の把握すべきものはウーシアの原理（プロータ）や原因（アイティア）に他ならない。自然によってであれ、人為的な技術にもとづいてであれ、存在するものはすべて、「或るものによって」（ヒュポ・テイノス）、「或るものから」（エク・テイノス）、「或るもの」（テイ）になるという構造を有している。「或るものによって」は運動因を、「或るものから」は質料因を、「或るもの」は目的因と形相因を意味している。

以上の四種類の原因性を家の建築を例にとって調べてみることにしよう。家を

建てる場合には、形相因にあたる設計図、質料因に該当する木材やコンクリートや石などの材料、さらに運動因となる設計師や大工などの建築技師、それに目的因に相当する完成された家といった四つの異なったaitiaが必ず存在していることが確かめられよう。まず最初の形相(eidos)についてであるが、それはある事物をそれがまさにそれである当のものたらしめるものとして、或る事物にその規定性を与えるものである。肉眼には見えないが、それを通して精神が直観的に看取する形姿(Ansehen)は、事物の本質性、或いは何としての本質である。ゲシュタルトとして刻印されている本質の見え姿(Ansehen, Anblick)は、モルフェー(morphē)であり、ラテン語ではformaと名づけられる(スコラ的概念では、causa formalis)。

或るものがそれからできあがっているその当のもの、つまり或るものの制作の素材はヒュレー(hylē)、ラテン語でmateriaと呼ばれる。そこからMaterie, materialといった言葉が生まれてきた。このような素材は、本質の見え姿を通じて形相化を受け入れるために、あらかじめ眼前に存在しなければならない当のものとして、本質という種の規定性の根底に横たわる当のもの、即ち、to hypokeimenon(基体)、ラテン語でsubstratumである(causa materialis)。

さらに、質料の形相化のプロセスとしての運動による突き動かしが不可欠である。運動(Kinesis)は広義には変化一般をさしているが、運動の始動は作用因と命名される(causa efficiens)。作用因というのは、運動を触発する当のものが形相化のプロセスに作用するからに他ならない。

目的(to tēlos)とは、右の形相化のプロセスが終局的に目ざしている当のもの、そのためのもの(das Umwilen)である(causa finalis)。アリストテレスにあっては形相と質料の合成体たる個物は、可能態から現実態への目的論的運動過程として把握されていたが、この目的概念こそアリストテレス哲学の重要な部分を担っている。

二、『形而上学』における現象学的契機

アリストテレス自身は『形而上学』を『形而上学』という名で呼んだことはなく、第一哲学と命名していた。その冒頭の有名な文章は、「人間は全て本性上、知ることを欲する」から始まるが、それは人間が知への根源的な志向によって心性化されていることを示している。ところで、我々の知の対象はすべて我々に対して現出する、即ちそれらは何らかの目立たない背景から出現して光の中へ入りこんでくる。フッサール現象学の基本テーゼによれば、こうした背景となるものこそ、あの指示の諸連関であり、諸地平に他ならない。現出するすべてのものは、このような地平的なものからその規定性と理解可能な意味とを受け取るのである。したがって、諸地平は、我々に出現する現出者の由来の領域である。現出者が現出するのは、それらがその地平的な由来から姿を現わすことによってなのである。

こうした地平思想に該当するギリシア的概念は何かといえば、gēnos(生成)である。ギリシア的に考えれば、現出はその地平的由来におかげをこうむっている。現出することは、何らかの由来から姿を現わすことである。それゆえにどの存在者もそのgēnos(由来、生成、発生)を有していることになる。日常の中で我々に現出する対象のgēnosは、生にとっての有用性という観点から規定されうることになろう。換言すればそのような対象は有用性という地平から出現してくるのである。これに反して、自己目的的な知の対象のgēnosの場合では、対象自身のあり方から離れて定立された何らかの目標に差し向けられるということは起こりようがない。つまりこの時、認識は対象自身のもとに滞留しているのである。したがって対象の現出はこのような場合に限り、異他的な地平から立ち現われるよう強制されることはもはやなく、それ自身の内に安らっている存在として考察されることが可能である。

アリストテレスにとって、第一哲学のテーマは存在するものを存在するものとしての限りにおいて把握することにあった。ここでは存在するものは、日常的生の目標設定(何らかの巧利性や実用性といった類の)という圧力に屈服して現出することはもはやない。このような、存在するものとのいわばリラックスした関係をよく表わすものこそ、存在するものをそれが存在する限りにおいて考察するという右の表現である。テオーリア(theoria)とは、日常的な実践や関心、或いは特殊科学的な観点といったものをすべてエポケー(遮断、中止)した純粋な把握のしかたということだ。「何かのために」、「何らかの利益を得んだために」という制約された知への志向ではなく、「ただそれ自身のために、知らんがために」、自己目的的、無制約的に認識することへ向かうことこそsophiaへの愛としての哲学の根本精神でもある。

存在しているものの存在への注視が守られるなら、現出する存在者の生成、その一番最初の由来、その始源的な根源に関して問いかけることができる。根源的な由来とは、現出者がその規定性についておかげを受けている当のものとして、

現在的に現出しているものに内在していなければならない。由来は、そこから出発するものに対してどこまでも支配的であるような始源でなければならない。この意味での支配的な始源というギリシア的概念は archē である（ラテン訳では principium）。我々はそれに対して始源根拠(支配的な規定として存在するものにおいてどこまでも現在的であるところの始源)という訳語を当てることにしたい。そうすると次に、この始源根拠と先に述べた原因性(aitia)との間の内的連関がどうなっているかという新しい問いが生まれてくる。[9]

ところで、第一哲学は三つのメルクマールによって特徴づけられる。定義される領域、問題視点、それに方法の三点である。第一哲学の領域とは全体としての存在者である。問題視点が目を向けているのは存在であり、方法論的には第一哲学は archē（始源根拠）の探究、原理の探究である。自然学の領域は、生活世界の中で出会われる変易する存在者の全体領域である。こうした存在者は運動の影響下にある。自然学における存在者の研究の問題視点がどこへ向けられているかといえば、それはピュシスとしての存在である。ピュシスという存在様式の解明が必要である。

変易する存在者の基本的な運動とは、それが現出することである。こうした現出とは、生成、成立、つまり gênesis（発生）である。現出としての発生とは、予め、または根底にある素材（hýle, hypokeimenon としての）が何らかの eidos の規定性（ゲシュタルト、morphē, Form）の中へ踏み入ることである。eidos は usia（本質＝Wesen）のことであるから、プラトンによれば変易する存在はすべて、gênesis eis usian（本質への発生）として生起する。そうすると、『自然学』は、こうしたプラトン的テーゼの具体的実行であったと言える。

何らかの本質への発生である現出は、その原因を他のものの内にではなく、自分自身の内にもっている。こうした、おのずから発現し、みずからに由って存立している自己原因性とは、あのピュシス以外の何物でもない。自己原因性の「おのずから」(von selbst) が変易する存在者の存在様式である。物は背景的地平を基盤にしつつ、そこに埋めこまれるしかたでそこから現出してくるが、その点に潜勢態から現勢態への、デュナミスからエネルゲイアへの運動、換言すれば本質への発生を看取することが可能である。こうした現出の単純な生起は文字通りおのずからくり返されるのであり、現出のこうした自己刷新的生成を、我々は驚きの念を抱きつつ根源的に経験することができる。このような自己更新、自己改新、自己新起 (Selbsterneuerung) は人間の側からの一切の関与なしにおのずと生じており、人間の意のままになる領分からは全く隔絶した何かとして、ギリシア人はこれをピュシスと呼んだにちがいない。

本質への生成が何らかのゲシュタルトを獲得しておのずから生起するとき、このことこそが生 (Leben) の本質内容なのである。生とはしたがって生長であり、生きとし生けるものはその生長に際し、その原因を自分自身の内に有している。おのずから現出すること、生きることは生きとし生けるものの存在としてだけでなく、変易する世界そのものの存在でもある。この意味において世界は、変易するものの生活世界である。先述した自然学の方法についてであるが、みずからの内に原因を有する存在者というとき、その原因 (aitia) とは変易する存在者において現在的かつ規定的たる第一の始源 (archē) のことに他ならない。それゆえに自然学においても archē が問われうることになる。ピュシスとは、以上を踏まえていえば、現出の絶えざる自己革新として始源がどこまでも支配的であることなのである。[10]

三、アリストテレス『自然学』の対象としてのピュシス

上述の所論を要約して反復しよう。ピュシスとは自分自身の存在の原因を自分の内に有していることを意味しているがゆえに、またそのことが存在者における始源的な由来の常住的に規定的な現在であり、したがって archē であるがゆえに、archē を求める第一哲学の探究は『自然学』の原因論の中でこそ具体化されているのである。ピュシスについては三重の意義を指摘できる。①変易する存在者の存在、② archē として、③①および②の意義のピュシスによって規定された存在者の全体。

現象学における生活世界は、意味の指示連関のことであるが、こうした指示連関に全ての世界が共属しあっている。生活世界という普遍的地平は、最も始源的な由来 (gênos) として現出する、眼前に立ち現われるかの出来事を支配しており、この意味でそれは archē である。生活世界についての日常的経験の中でそのように解された生活世界の非変転性 (Unwandelbarkeit) がいわゆる故郷 (Heimat) として捉えられるものである。

現出することは genesis eis usian であるから、eidos の変転することなき恒常性がそこに当然前提されている。こうした eidos の多様性の全体は光の次元 (eidos や vidēre の語源から言っても) から捉え返すことができる。プラトンのあの太陽

の比喩と共に始まる光の形而上学における見ることと光のメタファーを想起されたい。eidosという光の次元には或る種の持続性があり、それはgenesis eis usianの絶えざる生起における光の次元の自己刷新の恒常的な生を意味する。このような光の間断なき立ち登りを表わすイメージとして涸れることなくこんこんと湧き出ずる泉源だとか、薄明のうちに次第に力強さを増してくる曙光などが思い浮かべられてよい。

理解可能性、同時に規定性の全体として生活世界は光の次元と同じものであり、その次元はつねにおのずから立ち登るものとしてピュシスと同じものである。ピュシスと生活世界とは光の次元として明るさの性格を有するが、しかし目立たない背景にとどまる由来という点ではどこまでも暗さの性格を有する。こうした一見矛盾してみえる二義性はどのように理解されるべきであろうか。暗さはその暗さゆえに、みずからを好んで秘匿し、退行して闇の中に残存し続けるとすれば、潜勢態から顕勢態へのダイナミクスがどうなっているかが、まず問われねばならないであろう。

archē, phýsis並びに生活世界はそれらが背景に横たわる、現出することとしての存在に由来するという点で共通性を有する。普遍的地平としての生活世界は明るさの領域である。こうした捉え方は、eidosのおのずから生き生きと刷新する光の次元としてのピュシスの古代的理解の中ですでに早くから準備されている。そのようなものとしてピュシスは、意味の指示連関としての生活世界がそうであるように、規定性の全体である。

このような光の表象は、気づかれることなく背景の影の中にある由来の暗さとどう両立しうるであろうか。この点について、我々はハイデガーを引き合いに出すことができる。彼はまさに現出における暗い由来がギリシア人以来忘却されてきたことを発見したのであった。このような忘却の事態は、génesis eis usianにおける本質的なもの（usia及び目的としてのeidos）としてのエイドスの規定性の優位とどう関連するのかを一層よく考察しておく必要がある。ハイデガーによるこうした発見は実のところ、現出することの分析と関連させてはじめて地平概念を中心テーマにすえたフッサール現象学によって可能ならしめられたのである。ハイデガーの解釈学的現象学によって、a-létheiaのエチュモロギーが注目されるようになったのは大方の知る所であろう。ハイデガーにおいて、根源的な存在論的真理は非秘匿性(Un-verborgenheit)として、即ち暗い由来の秘匿性と、対向する規定性の現出することとして捉え返されたのである。

ギリシア的思惟における現出することの暗い由来にかんする別の手がかりを提供しよう。この関連でhypokéimenonとしてのhýleの特別な意義に目を向けてみることにしたい。或るものがそれからできあがる当の〝何から〟としての素材は、こうした由来を指し示している。あの四原因のうち、eidos, télosそして運動の開始の三つが互いに共属しあっているのに対して、hýleの占める位置は特別であった。

なぜ右のような区別ができたのか、即ち、規定に対して予めすでに横たわっているhýleと規定するものとしてのeidosの間で区別を設けることがなぜなされたのかといえば、それはもともとアリストテレスによって発見されたインド＝ヨーロッパ語的言表命題のモデル的な構造によって可能ならしめられたのではないかと考えられる。即ちそれは、ti katá tínos(或るものについての或るもの、etwas über etwas＝規定可能なものの規定）というモデル化された言語構造である。つまり言表は文法との関連でsubjectum＝主語（下に投げ置かれたもの）と呼ばれるhypokeímenonについて下されるわけである。先述した、既に眼前に横たわるものがeidosの規定性へ入ることの構造は、右に述べた言葉の構造の中に言語的に紛れようもなく現われてきていることは明らかである。なるほどeidosとhýleとの区別はこうした言語構造によって予描されていたことであるとはいっても、しかしこうした区別はどのようにして発見されることができたのであろうか。その点を次に検討することにしたい。

四、制作と自然

或るものの制作ということが、eidosとhýleの関係を露呈するための直観的な基礎となっているのは明白である。四原因説における原因の二つの根本様式（一方にhýle他方にeidos, télos, 運動の始まり）を区別するために、アリストテレスは制作プロセスに定位したにちがいない。つまり、eidosとhýleとの関係を明るみに取り出すために、或るものの制作ということが考察の発端に据えられたにちがいなく、こうした制作プロセスに即して二つの根本原因が確定されることが可能になったのである。

自然における〝おのずから〟ということと、技術における〝人間によって〟ということとの対比はすでに自明のものとなっている。これは今日でも自然と技術という区分として周知のものとなっているが、こうした対比の始まりは、アリス

トテレスまで遡ることも言うまでもない。ところで、ギリシア語の téchne という概念は知の一種に他ならない。即ち、或る人に対して、或るものを実現して仕上げる能力を与える所の或ることに精通することという意味での知である。換言すれば、或るものを実現し仕上げるプロセスを導くのは何かといえば、こうした或るものをわきまえて知っていることなのである。知としてのテクネーは、実現仕上げの活動そのもの、poíein 作ること（制作、仕立てる、製造するなど）と混同さるべきではない。人間によって制作されたもの、ポイエシスによって仕上げられたものは érgon 作品である。

どの poíesis もその始まりを、或る téchne の内に有し、この始まりによってどこまでも規定されつづける限り、先程の論拠からして、téchne は一つの arché 始源根拠、原理であると言うことができよう。形而上学の theoría は存在の地平の arché を問いかける（存在としての存在という純粋な仕方で）ということについては前述したとおりである。téchne はしかし、このような存在の地平に姿を現わすことは決してなく、むしろ作品（作られたもの）は使用の地平に属するが故に、効用性の中に姿を現わすほかない。つまりここに言う使用の地平とは意味の指示連関のことであり、この点に関連していえば、たとえば道具全体の適所性から指示されて有意義性を得る所以があるとみるハイデガーの道具分析を引き合いにだすだけで十分であろう。

支配しつづける始まりとしての téchne の支配の到達範囲は、érgon において終止符を打つ。téchne は作品というすでにできあがった存在者から分離しうるし、作品の中にそれが arché として現存しているわけでもない。poiein は技術と作品との間に存する。これに対し phýsis は根源の由来として、現出するものとしての全ての存在者のうちにつねに現前している。

できあがった作品は二重のしかたでその arché を問題にすることができる。というのはそれは、使用対象として日常的な有用性の地平の中に埋めこまれているが、しかし存在者としては純粋に存在の地平の中に埋めこまれているからである。作品が純粋に存在者として考察される限り、phýsis がその arché である。作品が使用地平におけるその役割りに関して問われる限り、指示の連関はそのつどの poíesis の始源根拠としての techné へとつながってゆく。

こうして二種類の arché 即ち、phýsis と téchne は各々に対応する地平の内部でのみ現出してくる。この地平はこれはこれで、対応する態度(theoría という特定の関心から離れた純粋な観察や、一定の目標に向けられた日常の関心）に対してのみ開かれてくるものである。以上のことが結局変易する存在者の全体を、おのずから成立するものと、人間の製作によって成立するもの（自然物と技術物、天然と人為、自然と芸術、自然と歴史、必然と自由などのヴァリエーションも含めて）という二つの領域への分割に導いたのではなかったか。かくて phýsis という概念は、変易する存在者の全体にかかわる根源的な広がりを失ってしまった。そして téchne の単なる反対概念としての phýsis という狭い概念が成立するのである。人間による自然への介入という近代の問題は、phýsis と téchne との対立という、疑問の多い妥当性を前提にしているが、このような対立は phýsis がかつて持っていた包括的で根源的な意義に比べれば、単に二次的にすぎないのである。

技術と自然との区別に対応して téchne on と phýsei on との区別は根本的な二種類の存在者として捉えなおされる。ギリシア初期の phýsis の arché 問題は、アリストテレスの見解によれば、phýsei on ta の狭義の phýsis にかかわっていたのではなく、広義の phýsis にかかわっていた。phýsis と téchne との対立がはじめて権威をもつようになったのは、アリストテレス以降のことである。こうした対立という点から、キケロの次の文章、即ち「ソクラテスは哲学を天上から地上へ引きずりおろした」も理解できるようになる。ここにいう天上とは自然全体の名称として使われており、地上という言葉で人間的な実践の領域のことが念頭に置かれている。そのような人間的実践は制作的実践をも含むが故に、天上と地上の対立の背後には自然と技術の対立が控えている。

ti katá tinós の構造によれば、genesis eis usian は hýle と eídos の間の根本区別に立脚している。eídos の側には一方に morphé (Gestalt) が他方に télos と arché tes kinéseos の相違がある。後二者は変易するものの存在の運動性格の解明に必須である。即ち hýle は eídos が乗っかるための開披に一押しを必要とする。この一押しは hýle に対して引き寄せる télos として差し出されるわけである。こうして運動の始まりと目的との二重性は、hýle と eídos との基礎的な二重性に対している。

téchne こそ hýle と eídos の根本区別にとっても、またそれに基づく arché tes kinéseos と télos の区別にとっても不可欠の直観領域である。つまり téchne は我々自身の知であるから、我々はこうした知の中に含まれる諸契機を、原因性の観点のもとで区別することができなければならない。こうした原因諸様式の区別可能性は、日常我々が出会っているような phýsei on に即して示されるのではない。téchne へはっきりとしたしかたで定位することなしに、変易する存在者一般

のarchéに向けられた問題設定というものは、なるほど原因存在一般への問いに達することはできようが、しかしさしあたりはその区別性という点では指示されえない。それゆえarchéの原因性は思惟の最初の始まりにあっては唯一の原因たるhýleの見え姿においてのみ語られたのである。[11]

原因性にかんする最初期の哲学者たちによる区別の欠陥は、まだ展開されていない思惟につきものの貧困にだけ由来するのではない。それはむしろ厳密に存在地平の中にとどまり、それゆえtéchneへの定位に依拠しない哲学の徹底性の帰結を示しているのである。それはとりもなおさず、最初期の哲学者たちにとって全体としての原因存在はマテリアルなものとイデエールなものとの区別なしに、尚未分の状態で示されていたからであろう。

結び

以上、ヘルトの冬学期講義の一部について、その大略を検討したのであるが、この解釈は概ね、ハイデガー独自の存在史観と基本的に合致するとみることができよう。ハイデガーの形而上学に対する極めて精妙な解釈によれば、eidosとhýleつまり、形相と質料の二元的区別は、道具をモデルにした制作的場面で発生したにちがいなく、ヒュレーは「制作的態度そのものに身を置く存在了解の地平」で存在者が把握されるときに必然的に生じてこざるをえない概念である。[12] イデアというメタ・フィジカルな原理の指定とマテリアールな自然観の成立とは不可分一体の関係にある。「制作物をモデルにした制作的存在論」によって、イオニア以来の自然的存在了解は破壊され、ピュシスに包みこまれていた全体的、根源的なものが忘却されることになったのである。[13] ピュシスは今やノモスやエートス、或いはテクネーの単なる反対概念でしかなく、本質存在(essentia)に対立させられる事実存在(existentia)という役割りに甘んずる他なくなってしまった。そのような区別や対立に先立つ、或いは主語―述語構造を備えた言表や、主観―客観分裂的な状況以前に、自然は一体どう出会われ、どのようなものとしてみずからを現わしているのか。そのような自然の根源的経験を表わす言葉を、ギリシア古典期の精神を自らの理想とした詩人ヘルダーリンから借りて、この小論の結びに代えることにしたい。

しかし今や夜が明ける！私は待ち焦れ、夜が明けるのを見た。
そして私が見たもの、聖なるものが私の言葉であらんことを。
なぜなら、自然、自然そのものは諸々の時間より古く、
そして西や東の神々より更に上なるものであり、
その自然が武具の響きと共に目覚める。
そして高くエーテルより下は深淵に至るまで、
往古さながら確たる掟によって聖なる混沌から生み出され、
霊感はみずからを新しく感ずるのである、
一切のものを創造する霊感は。

讃歌「あたかも祭の日の如く……」から[14]

注

(1) K・ヘルト教授の「冬学期講義」(一九九三／九四)についての筆者の手になる本報告に関しては、教授自身から論文での公開の許可を戴くことができた。記して感謝申しあげる。尚、筆者の注記と解釈を交じえた本論文についての内容上の責めは当然、筆者自身が負うべきものである。

(2) Husserl, E., Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie. Husserliana Bd, VI, ugl. §51.

(3) vgl. a. a. O. § 9

(4) vgl. a. a. O. § 2～ § 6 und § 72 ～ § 73

(5) vgl. a. a. O. § 9

(6) Heidegger, M., Einführung in die Metaphysik, 2. Aufl, Max Niemeyer Verlag, 1966, vgl. S. 54f. ハイデガーは『形而上学入門』で「ある」という語のエチュモロギーを考察している。「ある」は、sein, being, être, esse, εἶναι などの色んな変化形をもつが、彼はそこに「生きる」、「出現する」、「滞在する」という三つの共通の意味を確認している。ヘルトの本講義のテーマは、存在を根源的なピュシスとして提示することにあったと思われるが、このピュシスを右の三つの基本語を念頭に置いて読めば、講義内容もかなりわかりやすくなると信ずる。尚、自然的存在を「オート・ポイエーシス」のシステムと見るF・ヴァレラや、「セルフ・オーガナイジング・システム」として捉えるプリコジン等の現代の思想家の発言も十分注目に値する。また、日本思惟を①non-substantiality(非実体性)②each-other-ness(相互性)③self-becomingness(自己生成性)の三つの特質で特徴づける伊

東俊太郎の考えも、日本的な「自然思想」を考える上で良い手がかりとなる。この点については『仏教』(no.32) を参照。

(7) J・ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』(上) 未来社　一九八五年を参照

(8) 立野清隆『古代と中世の哲学』、世界書院、一九六九年、九六頁―一三七頁を参照。自然を「自ら発現生起し、自らによってまた自らにおいて存立し、持続的に滞在しかつ支配的なもの」という意味において捉えんとする著者の考えは、ヘルトのアリストテレス解釈の基本線とよく一致している。

(9) アリストテレス『形而上学』983 b2,『形而上学』の archai と『自然学』の aitiai とはしばしば等置されている。

(10) 日本文化会議編『自然の思想』研究社　一九七四年、五九頁以下を参照。世界をデミウルゴスの制作であるとするプラトン思想の異端性が指摘されている。つまり自成的自然ではなく、一つの構成としての自然という概念がプラトンの中にあり、それがキリスト教の創造の考えと結びついて近代思想に大きな影響を及ぼしたのであり、プラトン的なものが近代の自然科学を、キリスト教を媒介にしつつ育てあげていったという見解が示されている。

(11) アリストテレス『形而上学』第一巻　三章、904 a 17「ヒュレーの見え姿において語られた原因……」とあるのは、このことをさしている。ヒュレー的な原因の内で、archē 一般の特徴が否応なく現われてくるからである。

(12) 木田元『哲学と反哲学』岩波書店　一九九〇年、二〇七頁を参照。

(13) Heidegger, M., Nietzsche I, S. 96f.

(14) Heidegger, M., Wegmarken, Gesamtausgabe 9. S. 240

(平成七年九月二十五日受理)

(宇部工業高等専門学校社会教室)